

# REACT

2020年6月号



国境なき医師団の医療活動は皆さまからの寄付で実現しています。



1 地元の医療施設が重度の患者の治療に集中できるよう、中・軽度な患者向けの仮設病院の設置を支援(スペイン) 2 モリア難民キャンプでは、患者の特定や、水と衛生の設備などを強化(ギリシャ) 3 過酷な環境で暮らすドゥッタ難民キャンプの人びとへ衛生教育を実施(タンザニア)

## ACTIVITY NEWS IN FOCUS

### 新型コロナウイルス感染症 世界各地で緊急援助活動を拡大

世界的な感染拡大を受け、2020年4月22日現在、MSFは欧州をはじめ、中東、アジア、北米、中南米と世界各地で緊急援助活動を展開しています。感染リスクにさらされている医療従事者へのサポートを強化するほか、密集した難民キャンプ、紛争地といった医療・衛生設備が整っていない地域に暮らす人やホームレスの人など弱い立場に置かれた人びとへの支援を中心に行っています。最新の活動は、随時公式サイトでお知らせしてまいります。

### 「新型コロナウイルス感染症危機対応募金」にご協力をお願いします

援助拡大のため、どうか皆さまのお力をお貸しください。世界全体で1億ユーロ(約120億円\*)、日本で583万ユーロ(約7億円\*)を目標に資金を募っています。 \*1ユーロ=120円で換算。

#### お申し込み方法

- 同封の「新型コロナウイルス感染症危機対応募金」用振込用紙で
- ウェブサイトから ▶ [www.msf.or.jp/COVID19/](http://www.msf.or.jp/COVID19/)

いただいたご寄付は、世界各地で行う新型コロナウイルス感染症の緊急援助活動と感染症拡大の影響に伴うその他の援助活動に割り当てられます。この活動に必要な資金を上回る寄付をいただいた場合は、その他の緊急援助活動にあてられます。また、活動状況や資金調達状況に応じて、本募金の受付を予告なく終了する場合があります。

# この10年に皆さまの力で できたことと、支援のいま

## アフガニスタン・ブースト病院支援 / ハイチ、大震災を経て

## 新型コロナウイルス感染症危機対応募金 受付中

事務局員コラム まだまだ「国境なき医師団」を見に行く 特別編  
国境なき医師団日本 2019年度財務報告・新会長あいさつ



特定非営利活動法人国境なき医師団日本

寄付や「REACT」に関するお問い合わせ

0120-999-199 (平日9:00~18:00 土日祝、年末年始休業 通話料無料)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 FORECAST 早稲田 FIRST 3階  
Tel: 03-5286-6123 (代表)

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、場合によっては寄付に関するお手続きや領収書の発行といった、事務対応に遅延が発生する可能性があります。何卒ご了承くださいませようお願いします。

[www.msf.or.jp](http://www.msf.or.jp)

「REACT(リアクト)」は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撃する世界の人的危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、共に考えていただくための情報をお届けします。

国境なき医師団は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機にひんした人びとの緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする海外派遣スタッフと、現地スタッフ、事務局スタッフの合計約4万7000人が、世界70か国以上で活動しています(2018年度)。

#### アンケートのお願い

「REACT 2019年12月号」に同封のアンケートに、4000人以上の方が回答をお寄せくださいました。本当にありがとうございました。現在、皆さまの回答・コメント一つ一つを拝読し、より良いニュースレターをお届けできるよう鋭意準備中です。

今号のアンケートにもぜひご協力ください。ご協力いただいた方の中から抽選で10名さまにMSFオリジナルランチャバッグ(右写真)を差し上げます。 ※お寄せいただいた個人情報はアンケート分析にのみ利用いたします。



**郵送** 郵便はがきにご住所、お名前、ご支援者番号、年齢、職業、アンケート回答をご記入の上、先の住所までお送りください。2020年7月末日消印有効

宛先 国境なき医師団日本・「REACT」係宛

**WEB** トップページ → MSF図書館 → 読み物 → 「REACT」 2020年7月末日まで受け付け

◎ 次の質問にお答えください。

- ① 特に印象に残った記事を2つ、理由と共に教えてください。
- ② あまり読まなかった記事があれば、理由と共に教えてください。
- ③ ご意見・ご感想を自由にお聞かせください。



2016



写真右/下痢をした子どもの水分補給を助けるのも大事な仕事。2018年には、小児科で140床を占めた。  
写真上/女性の入院病棟。面会中に子どもをケアする父親の姿も。写真下/ブースト病院の入り口には「武器持ち込み禁止」の看板が掲げられている。院内の安全性確保のために欠かせない。

2010



© Ton Koene

【数字で見る活動ハイライト】

増える医療ニーズに合わせて活動拡大

2010年 2019年

ベッド数 : 150床 ⇒ 400床

スタッフ数 : 130人 ⇒ 994人

外来診療数 : 4万8292件 ⇒ 15万5432件 (救急診療のみ)

現地の人びとの声

家の外が危険で病院へ行くことができない……

12歳の息子は家の外で銃撃に巻き込まれ、撃たれました。戦闘が続いていて病院に行けず、車もありませんでした。息子の出血はひどく、最終的に警察が車で病院に連れて行ってくれましたが、もう手遅れでした。息子は亡くなりました。

プーレスト病院は、南部ヘルマンド州の州都ラシュカルガにある拠点病院です。アフガニスタンでは、2004年にMSFのスタッフ5人が襲撃で命を落とし、活動を一時中断。

プーレスト病院は、南部ヘルマンド州の州都ラシュカルガにある拠点病院です。アフガニスタンでは、2004年にMSFのスタッフ5人が襲撃で命を落とし、活動を一時中断。

しかし医療事情の悪化を受けて09年にプーレスト病院の運営を支援し始め、昨年で10周年を迎えました。この10年、紛争激化によって患者の数は激増。プーレスト病院はMSFの資金を基盤に建物を改修し、診療科を増やしてきました。いまでは、外科、産科、小児科、内科、救急・集中治療室を備え、出産支援、栄養治療も行っています。ひと月当たりの入院患者数は10年前に比べ、30倍の3500人に。州内の100万人の住民の健康を守っています。

とはいえ冒頭の母親のように、多くの人がとって、病院へのアクセスはまだまだ容易ではありません。自宅出産が多いため、産後出血が続く、病院に到着する頃にはショック状態にある女性も少なくありません。貧困も深刻で、5歳以下の子どもの4割超が栄養失調に陥っています。

プーレスト病院は、いまやアフガニスタンの人びとの命を守る砦。これまでの10年もこれからも、皆さまの支援こそが病院を支える力です。

紛争が病院への道を阻む

「産科で出産したばかりの母親が、故郷の村への空爆によって、村に残してきた2人の子どもを失ったと聞いた時、私には母親に掛ける言葉が見つけれませんでした。最低でも3時間はかけてヒッチハイクをして家に戻り埋葬をするか、病院に留まるべきか、難しい選択を迫られました。昨年、アフガニスタンのプーレスト病院で看護師として活動したジェシー・ペリーはこう振り返ります。プーレスト病院は、南部ヘルマンド州の州都ラシュカルガにある拠点病院です。アフガニスタンでは、2004年にMSFのスタッフ5人が襲撃で命を落とし、活動を一時中断。

この10年で、ベッド数も患者数も増え、良質な医療を提供する病院に成長したプーレスト病院。現在も残る課題とは？

同僚の死を乗り越え、活動再開。いまなお紛争の続くアフガニスタンで、100万人の健康を支える

COUNTRY DATA

首都はカブール。反政府武装組織タリバンが国土の半分近くを影響下に置き、約21万人(2019年)の難民がいる\*。南部のヘルマンド州は頻発する戦闘と無差別な暴力が特に激しく、医療ニーズがとて高い。

\*国連難民高等弁務官事務所 グローバル・トレンドズ2018レポート



2020年代の始まりに振り返る

この10年に皆さまの力でできたことと、支援のいま

いつも国境なき医師団(MSF)へのご支援を本当にありがとうございます。2010年代、年々活動国・地域を広げ、より多くの人びとに医療を届けることができたのは、ほかならぬ皆さまのおかげです。「2020年代」の始まりのこの機会に、感謝を込めて過去10年に成し遂げられたことをお伝えするとともに、いまも継続的に行っている支援や課題についてご報告します。どんな地域のどんな活動が、皆さまのご記憶に残っているでしょうか？

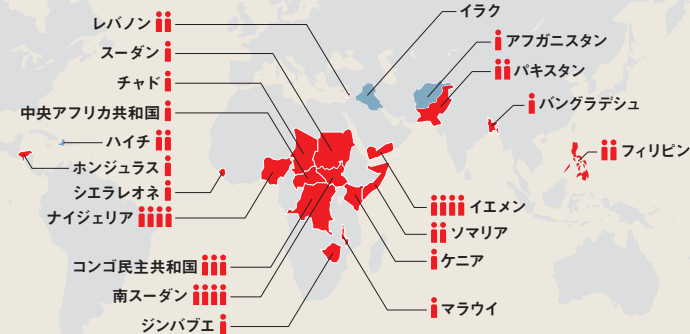
『REACT』2020.6 CONTENTS

- 特集  
アフガニスタン/ハイチ
- 02 この10年に皆さまの力でできたことと、支援のいま
- 07 まだまだ「国境なき医師団」を見に行く 特別編
- 08 現地スタッフに高い技術力を! いま広まる「POCUS」トレーニングとは
- 09 VOICE 派遣スタッフの声 土岐 翠 (助産師)
- 10 支援者のひろば 特別編
- 11 もっと知りたい! MSFスタッフの素顔 第3回 滝上 隆一 (外科医) / 小島 穂奈 (助産師)
- 12 2019年度 国境なき医師団日本 財務報告
- 13 2020年度 国境なき医師団 医療援助活動計画
- 14 MSFインフォメーション
- 15 ご支援方法のご紹介ー遺産からの寄付

裏表紙 IN FOCUS  
新型コロナウイルス感染症  
世界各地で緊急援助活動を拡大

表紙: 国境なき医師団が10年支援を続けるアフガニスタンのプーレスト病院。小児集中治療室には常に小さな患者が運ばれてくる。

今号掲載国  
MSF日本からの派遣者数(19ヵ国・35人/2020年4月8日現在)







ミランダちゃんを覚えていますか？

### 被災し、大けがを負いながら「サッカーをしてみたい！」

大地震当日、倒れた自宅の下敷きになり、大けがを負った少女、ミランダ・ピエール。当時10歳だった彼女を父親が救助できたのは地震発生から数日たった後。その間、「また学校に行きたい！だから、絶対にここを出る」と彼女は希望を捨てませんでした。右脚は、付け根から切断。屈曲した左腕の手術を何度も行う過酷な治療も続く中、持ち前の明るさで治療とリハビリに取り組む姿を『REACT2010年12月号』でレポート。ご記憶に残っている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

入院中のある日、彼女はこう言います。「サッカーをしてみたい」と。ベッドから出て、歩行器で歩くリハビリを始まりました。そうして、ついに彼女は看護師に支えられながら、はじける笑顔でボールを転がしたのです(上写真)。彼女の将来の夢は、看護師になること。「病院で働く看護師さんを見るのが好きだったから」です。勇気ある彼女が将来、誰かを励ます日が来るのかもしれません。



義足を着けて、歩行器でリハビリ中。「2本の脚で立っている写真を撮って！」と笑顔で。

あれから10年を経て、ハイチに関する報道は大きく減少。世界から忘れられた国といわれるハイチはいま、どんな状況にあるのでしょうか。

地震のがれきは減り、復興は進みつつも、現在、ハイチは政治的・経済的危機に直面し、大規模なデモや暴動が常態化しています。毎年のように襲ってくるハリケーンや、その影響で頻発するコレラ、西半球一の水準とされる貧困も、人びとの安全な暮らしを脅かしています。治療費を捻出できない上に、暴動の影響で外出時の危険が増しているため、病院での受診を控える人が多いのです。

こうした中、MSFは19年11月、首都ポルトープランス市に、救命措置を主軸にした病院を開きました。強盗に銃で2回撃たれた女性、ギャ

ングの抗争に遭い、流れ弾でけがを負った男性……。続々と運ばれてくる患者によって、最初の2週間で、救急外来のベッド25床が瞬く間に埋まりました。治安悪化をたどるハイチはいまなお、MSFの医療援助を必要としています。

写真右／カルフル病院のビルの外に一時的に設置した手術室。両脚を骨折していた女性患者に対し、スタッフがケアを行っている。写真下(2019)／この日タバル外傷センターに運ばれてきたのは、刺された男性だった。写真下(2016)／やけど専門病院的待合室で順番を待つ母子。地震後、仮設テントや小さな家に身を寄せる大家族が多いため、調理中に子どもたちが鍋の油をかぶるなどの事故で、重いやけどを負う子どもが少なくない。



2019



2016

ハイチへの緊急援助に迅速に動いたMSFは皆さまからの111億円もの支援金に支えられ、10カ月で約36万もの人びとを治療。地震後に発生したコレラへの対応を含め、海外派遣スタッフ260人とその10倍以上の現地スタッフとで26の病院と数十カ所での移動診療に取り組みしました。MSFにとって、当時の団体史上最大規模の活動でした。



**【数字で見る活動ハイライト】**

ハイチ大地震に関連して

- 診療患者数 : 計**35万8000人**
- 心のケアを受けた人数 : **17万7000人** (以上、2010年1~10月)
- コレラ治療数 : **30万人** (2010~2016年)

現在

- 救急診療数 : **2万9000件** (2019年11~12月、タバル外傷センター)



2010年の大地震直後のポルトープランス市の中心部。背後には暮らしを支える中央市場が燃え、戦争地帯のよう。



**COUNTRY DATA**

カリブ海の島国で、キューバ、ジャマイカ、ドミニカ共和国に囲まれる共和制国家。首都はポルトープランス。独立以来、政治的混乱が続いており、それが地震からの復興の妨げとなった。市民による大規模な反政府デモも激化している。貧しい家庭では、やけどによる事故も多い。

# 当時、最大規模の援助となったハイチ大地震。あれから10年——国際社会から忘れ去られた地に医療を

西半球の最貧国、ハイチ。社会インフラが脆弱だったこの国は大地震で大きな打撃を受けました。当時の緊急援助を振り返りつつ、人びとがいまなお、安全な暮らし・医療を取り戻せていない事情に迫ります。

## デモや暴動、自然災害の脅威

2010年1月12日、マグニチュード7.0の地震がハイチを襲いました。政情不安により社会インフラが機能していない中、建物の倒壊や爆発事故に巻き込まれる人も多く、何十万人もの命が奪われました。

ハイチへの緊急援助に迅速に動いたMSFは皆さまからの111億円もの支援金に支えられ、10カ月で約36万もの人びとを治療。地震後に発生したコレラへの対応を含め、海外派遣スタッフ260人とその10倍以上の現地スタッフとで26の病院と数十カ所での移動診療に取り組みしました。MSFにとって、当時の団体史上最大規模の活動でした。





# まだまだ 「国境なき 医師団」を 見に行く

## 特別編

“メモが命”のいとうさん。小さなノートを肌身離さず取材地へ持っていく。

作家・クリエイターのいとうせいこうさんが、MSFの現場を取材してルポルタージュにまとめ、文芸誌やウェブで発表して下さって約4年。2018年から、取材を手配し同行しているのが、MSF日本・広報部のスタッフの館俊平です。今号では、まだまだ「国境なき医師団」を見に行く・特別編として、館が取材の裏話をつづります。

私はいとうさんのMSF取材の2代目担当者として、これまで南スーダンと中東のパレスチナ・ヨルダンでの取材を一緒にしました。それまでの取材は比較的治安の良い場所でしたが、MSFと紛争は切り離せないため、思い切った内戦や封鎖状態にある活動地にお連れしたいと思ったのです。いづれも日本からの渡航は控えよとされる地域。いとうさんは不安ながらも私たちが信用して来ていただいたものと思います。いとうさんは取材する国やMSFの活動について事前に情報収集をされません。予備知識なく現地に行くことで可能となることを大事にされています。世界には都合の悪いことを隠す権力者や、その悪政に苦しむ市民がいます。そんな中、部外者として「知らん顔」をして現場に入り、物を書くことができるのです。ジャーナリストではなく作家としてのアプローチです。支援者の皆さまはよく「存じかと思えますが、MSFには緊急医療援助の他に「証言活動」という大事な使命があります。活動地で目撃した人道危機を伝えることは、私たちMSFのアイデンティティーとなっています。いとうさんは、

中央にいるのが「広報の館」です!

### なぜいとうさんがMSFを取材?

約10年前、男性用日傘を開発し、そのアイデア料をMSFに寄付して下さったいとうさん。それを機にMSFが取材へ向うと、「もっとMSFのことをみんなに知らせたい!」と、いとうさんによるMSFへの“逆取材”がスタートしました。2016年から現在まで、MSFの活動地を6度訪れました。

過去の取材記を以下の書籍でお読みいただけます

『「国境なき医師団」を見に行く』  
(講談社刊)

『「国境なき医師団」になろう!』  
(講談社現代新書)

こうした証言活動の手法にも新たな道——「知らん顔である証言」を切り開いた人だと思えます。そしていとうさんの文章はユーモアにあふれています。悲惨な状況を目にしても、人がより理解できるようにユーモアを持って書くよう心掛けているそうです。「患者さんの代わりに俺が(弱き者の叫びを)書こう!」という気概。私はそんないとうさんの文章に、パレスチナの分離壁に書かれた数々の路上アート、権力に向かって市民の叫びを描いたグラフィティ\*を重ね合わせます。

いとうさんはMSFに寄付をする支援者の一人です。そしてその「代表」として、寄付金が活動現場できちんと使われているか、しっかりとご覧になっています。取材でも、飛行機はエコノミークラス、宿泊と食事も基本的にはスタッフと同じく質素、時には私と相部屋となることも。そんな時でもいとうさんは嫌な顔をせず、むしろ節約を誇りに感じて、MSFの一員として不遜さも楽しんでいただいていると思います。

昨年取材から帰国した際、いとうさんは、パレスチナとヨルダンの話を、「気合を入れて書きます」と言ってくれました。11日間の駆け足取材でしたが、たくさんものをもち帰っていただいたことを知り、とてもうれしく感じ、担当冥利に尽きました。

\*グラフィティ: スプレーなどを使って壁などに描かれた絵やメッセージのこと。

いとうせいこうさんの中東取材ルポが、文芸誌『群像』で連載中!

3月号から始まった短期集中連載も、いよいよ大詰め。発売中の7月号も必見です!(講談社、予価・税抜き1182円)



猫好きないとうさん。3大宗教の聖地でめったに人にこびかない猫が近づいてきたことを「何かの恩寵」と感じたそう(東エルサレムの旧市街にて)。

# この10年、さまざまな命の危機に 医療を届けることができました

この10年で紛争や自然災害、感染症の感染拡大などによる命の危機は尽きず、MSFは皆さまからのご支援を元にさまざまな活動を展開してきました。中には現在も続いている活動も。ここでは規模の大きかった活動を振り返ります。

## シリア内戦激化 いまも630万人が国外へ避難

2011~

東日本大震災の発生とはほぼ同時期、「アラブの春」からの流れでシリアが内戦状態に。9年を経た現在も収束の気配はなく、内戦はいっそう複雑化。多くの民間の人びとが命を落とし、630万人\*1が国外へ避難を強いられています。機度なく活動の一時中断を余儀なくされながらも、MSFはシリア国内外で医療援助を続けています。シリアの活動の財源は民間からの寄付のみ。皆さまの力が人びとの命をつないでいます。



## 2011 東日本大震災では 翌日から緊急援助開始



震災翌日の3月12日にニーズ調査のため現地入りし、宮城県と岩手県で緊急援助を開始。MSF日本からも医師やロジスティシャンら41人のスタッフが派遣され、避難所での移動診療や心のケア、仮設住宅の建設支援に当たりました。

## フィリピンに台風30号が直撃

2013



11月、台風30号により甚大な被害が出たフィリピン。MSFはすぐさま緊急援助チームを立ち上げ、医療キットやエアータント式仮設病院(写真)などを輸送。翌年11月までに9万人以上を診療、8万人以上に清潔な水を配布しました。

## 2014~15 西アフリカでのエボラ大流行 いち早く現場へ



創設以来、最大規模の緊急援助となったエボラ出血熱対応。主にギニア、シエラレオネ、リベリアの3か国で治療や調査・監視、人びとへの健康教育、心のケアを実施。流行中に感染が確認された患者の3分の1をMSFが対応しました。

■活動費総額 約 <b>132億1900万円</b> *2 (2014年3月~2015年12月)	■日本からの派遣実績 <b>26名のべ30回</b> リベリア、シエラレオネ、ギニアの3か国
--	--

## イスラム系少数民族ロヒンギャ 91万人に医療を届け続ける

2017~



ミャンマー軍がロヒンギャの人びとを狙った大規模な掃討作戦を開始し、昨年までに91万人がバングラデシュへ避難。世界最大の難民キャンプでMSFは援助活動を続けています。いまも人びとは過酷な環境での生活を強いられました。

## 2020 新型コロナウイルスへの対応開始

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、MSFも各国で緊急援助を開始。裏表紙もあわせてご覧ください。

\*1 国連難民高等弁務官事務所 グローバル・トレンド2018年レポート  
\*2 2015年当時のレートで換算





ベビーマッサージの技術指導も行った。

中学生の頃に見たテレビ番組で、アフリカの子どもが銃を持っている映像が忘れられず、自分に何ができるだろうか、ずっと考えてきました。その答えとして医療の道に進むことに決め、助産師として国境なき医師団(MSF)で働くことを目標にしてみました。

念願がかない、2019年7月にイラク北部の都市モスルの病院に派遣されました。モスルは過激派組織「イスラム国」から解放されて間もなく3年がたちます。平穏が戻ってきていると思える一方で、目にする

現地スタッフとの関わりの中で感じた難しさの中に「死」に対するケアがありました。妊婦健診が確立されていないモスルでは、死産や出生後に赤ちゃんが亡くなるケースが少なくありませんでした。現場では子亡くした母親への適切なグリーフケア\*が全く行われていませんでしたが、それは紛争によってスタッフ自身もあまりに多くの人の死にさらされ続け、「死」と向き合うことに恐

怖を抱いていたからでした。グリーフケアの指導は、スタッフたちに亡くなった家族や悲惨な光景を思い起こさせるきっかけとなるため、本当に繊細で難しく、紛争は終結しても残された人びとが背負って生きていかなければいけないものの大きさと悲しみを日々肌で感じていました。

また、活動中常に考えさせられていたのは、女性の権利についてです。手術、治療、避妊、何をしても女性性は自ら決断することは許されていませんでした。ある日出会った患者さんは、23歳。帝王切開を過去に3回経験しており、次に妊娠すると合併症などを起こし、最悪の場合、死に至る危険性がありました。イラクではホルモン剤の入った小さな器具を腕に挿入する避妊方法が認められており、彼女はそれを望みましたが夫や家族が認めませんでした。

### 風習との違いに悩んだ日々

もう妊娠したくない、と泣いて家族に懇願する彼女を見て、このままでは死んでしまいかねない彼女を守りたいと強く感じました。私は通訳

性を確信しました。そこで2017年、南スーダンを皮切りに、現地採用の医師や助産師らを対象に「POCUS」のトレーニングを本格的に始めました。彼らの中には紛争などのために、仕事や教育を中断せざるを得なかった優秀な人も数多くいます。

「POCUS」のトレーニングは、こうした現地スタッフのスキルアップのみならず、うれしいことに、モチベーションのアップにもつながっているのです。このプロジェクトのコーディネーターで医師のエリン・ストラータは笑顔でこう話します。

この2年で、イエメンやバングラデシュなど15カ国の医師、助産師など400人以上の現地スタッフが、トレーニングを修了。今後は、トレーナー役ができる現地スタッフの養成にも力を注いでいきます。

\*グリーフケア：大切な人を失った人に寄り添い、喪失の回復をサポートすること。

「種をまかないと、花は咲かないから」。  
その言葉に励まされた、初めての派遣

紛争のひどさを物語る街並み

街並みは月日がたったいまも紛争がどれだけ激しいものであったかを物語っており、人びとがどれほどの恐怖の中、毎日生きていたのかと思うと胸が締め付けられました。

私の活動していた病院は、スタッフ総勢400人ほど、月に分娩件数が700を超えるほど大きく、現地の助産師、看護師40人のトレーニングや指導が私の役割でした。現地では妊婦健診や分娩管理、家族計画などのニーズがあり、金銭的に余裕のない多くの患者さんがMSFの病院に何時間もかけて来ているのを見るたびに、支援者の方あつての活動だなとつくづく感じていました。

### 助産師 土岐 翠

Midori Toki  
鳥根県出身。助産師として7年経験を積んだ後、英語を習得するためオーストラリアへ。帰国後、MSFへの派遣が決まるまでは大学病院や個人クリニックで経験を積んだ。2019年にMSFに初参加。



現地の助産師と共に。



1 ベッドでも使える「POCUS」。赤ちゃんをお母さんのそばに寝かせたままの検査が可能になった(タンザニア) 2 「POCUS」を使い、治療方針を自信を持って提案できるようになり、現地スタッフも思わず笑顔に(イエメン) 3 医療の質を高く保つため、ポータブルエコープロジェクト・チームは各活動地で長期にわたるトレーニング、およびフォローアップを行っている。

現地スタッフに高い技術力を！  
いま広まる「POCUS」トレーニングとは

日頃、国境なき医師団(MSF)が力を入れていることの一つに、現地スタッフの「スキルアップ」があります。彼らが高い技術を習得することで、より良い医療を届けられるからです。中でも、いま使いが増えているポータブルエコーの研修についてご紹介します。

### 診断の精度を上げるために

MSFの現場には、放射線技師などの専門家がいない上、日本のようにCTやMRIなど大掛かりな検査機器もありません。こうした現場だからこそ、的確な治療を行うための診断の精度が、患者さんの命を救うカギになります。

いま、MSFの診断にイノベーションを起こしているのが、持ち運びができるポータブルエコー、「POCUS」です。専門家でもなくても使い方を習得できる機器で、包括的な診断ではなく、特定の疑わしい症状を診断できます(下の囲み参照)。

例えば外傷のある患者さんが腹部内で出血していて、手術を急ぐかどうかなどを、迅速に判断できます。

結核病棟で「POCUS」を使い、胸に水がたまっていることが瞬時に分かった子どももいました。胸を叩いて音を聞く従来の方法に加えて、「POCUS」を使うことでさらに容易に確認できるようになったのです。

MSFは、数多くの救急現場での経験から、患者さんの状態を迅速に把握できる超音波診断の重要

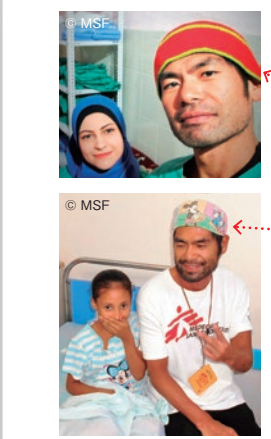
### なぜいま、活動地でポータブルエコーが必要なの？

- どこでも迅速に診断できる  
紛争地などの救急現場では、患者を動かすこと自体が難しい場合が多い。離れた病院への移動には危険も伴う。そこで、屋外などどんな現場でも、速やかに鑑別診断を行うことがとても重要。
- さまざまな診断に使える  
小型とはいえ一台で、心機能の測定、気胸や細菌性肺炎の有無、胸腔内・腹腔内の血液の漏れの診断のみならず、妊娠、HIV/エイズの兆候など、患者一人一人に必要なさまざまな診断を行うことができる。
- 専門家でもなくても使える  
数週間にわたる継続的な研修を受け、「POCUS」の診断ガイドラインに沿って使うことで、画像診断の専門家でもなくても特定の症状の鑑別診断が可能に。医師以外に助産師も使い手になっている。

\*POCUSとはPoint-of-care Ultrasound Sonographyの略。



第3回  
もっと知りたい！  
MSFスタッフの素顔



写真左下 / イエメンで出会ったのはキャラクター好きな女の子。帽子のおかげで話が盛り上がり、手術もうまくいった。

フの技量や手術道具の種類も、日本とは異なります。緊張感のある手術を前に、帽子のひもを結ぶことで、困難に立ち向かっていく気持ちが生まれます。

第3回は、海外派遣スタッフ2人の「派遣先に必ず持っていくもの」をご紹介します。活動中、心の支えになっているものとは？

外科医

石垣島の同僚から贈られた  
手術時の心の支えに

外科医  
滝上 隆一

普段、石垣島の病院で医師として働いています。初派遣の時から毎回、同僚が手作りの手術帽を持たせてくれます。僕は強面なので、子どもが怖がらないようにとキャラクター柄のものを頂いたのが最初です。現地の人に日本の文化を感じてもらえるような柄のものも多いです。無事に日本に帰っ

てきてね、という願いも込められているようです。ありがたい……。『ビューティフル』と言われる、帽子が現地スタッフや患者さんとのコミュニケーションのきっかけになることも。2017年のイラク派遣の際に出会った通訳のサナさん。過激派組織「イスラム国」の支配下で外出がままならず、家で手芸を楽しむうちに得意になったと言います。手編みの手術帽をプレゼントしてくれました。この帽子もいまま大切に使っています（写真・左上）。

●MSF派遣歴

2016年 イエメン × 2回
2017年 イラク
2018年 イラク
2019年 イエメン



常に移民の人びとのそばにいる海難救助船は、まるで「動く小さな家」です。活動中にふっと思いきや、賞することできる大切な時間になります。

ここ数年は、海難救助の活動に参加しています。暴力や搾取から逃れるため、小型ボートで地中海を渡って欧州を目指している移民の人びとを救助し、欧州各地へ送り届ける任務です。救助船には、すし詰めで危険な状態で小型ボートに乗った人たちが、日々救助されてきます。救助活動を繰り返して、定員以上の人が乗り込み、人であふれ返ることもあります。また暴力から逃れられても、次は欧州への下船の交渉がなかなか進まないこともありま。そんな不安やストレスの多い日々を過ごすなくてはいけない人びとと一緒に

に、映画を見ていました。作品は主に私の好きなジブリ作品です。『となりのトトロ』は子どもたちに、『魔女の宅急便』は女性に人気がありましたね。2017年の南スーダンでの任務の時は、宿舎の壁にシーツを張ってプロジェクトで映し、海外派遣スタッフたちと一緒に見ました。ちょっとシワが寄りますが、問題なく見られました。トトロに出てくるキッチンシーンのように、鍋の湯気からは本当にみそ汁の香りがしそうで、派遣先でみそ汁を飲むようになります。

●MSF派遣歴

2014年 パキスタン × 2回
2015年 イラク、レバノン
2016年 レバノン、地中海海難救助
2017年 南スーダン、バングラデシュ
2018年 カメルーン
2019年 地中海海難救助

助産師

大好きな映画を見るために  
小型プロジェクトと  
スピーカーは欠かせない！

助産師  
小島 穂奈

ここ数年は、海難救助の活動に参加しています。暴力や搾取から逃れるため、小型ボートで地中海を渡って欧州を目指している移民の人びとを救助し、欧州各地へ送り届ける任務です。救助船には、すし詰めで危険な状態で小型ボートに乗った人たちが、日々救助されてきます。救助活動を繰り返して、定員以上の人が乗り込み、人であふれ返ることもあります。また暴力から逃れられても、次は欧州への下船の交渉がなかなか進まないこともありま。そんな不安やストレスの多い日々を過ごすなくてはいけない人びとと一緒に

に、映画を見ていました。作品は主に私の好きなジブリ作品です。『となりのトトロ』は子どもたちに、『魔女の宅急便』は女性に人気がありましたね。2017年の南スーダンでの任務の時は、宿舎の壁にシーツを張ってプロジェクトで映し、海外派遣スタッフたちと一緒に見ました。ちょっとシワが寄りますが、問題なく見られました。トトロに出てくるキッチンシーンのように、鍋の湯気からは本当にみそ汁の香りがしそうで、派遣先でみそ汁を飲むようになります。

●MSF派遣歴

2014年 パキスタン × 2回
2015年 イラク、レバノン
2016年 レバノン、地中海海難救助
2017年 南スーダン、バングラデシュ
2018年 カメルーン
2019年 地中海海難救助

スタッフへの質問、大募集！ 「活動地での自由時間は何を？」 「事務局ではどんなことをしているの？」 など、気になったことを何でもお寄せください。裏表紙に記載の住所に、「スタッフへの質問係」と添えてお送りください。

国境なき医師団  
支援者のひろば



国境なき医師団 (MSF) の活動の大きな原動力でもある、皆さまからの温かな声。中には高校生から頂くことも。「スピーチ大会で、MSFについて話しました」と連絡を下さった、大阪に住む高校3年生の中根彩巴 (なかねいろは) さんの声を特別編としてご紹介します。

なぜ、スピーチ大会のトピックにMSFを？

中学3年生の時、最寄り駅でMSFの街頭キャンペーンを見て、もともと国際情勢や国際関係に興味があったため話を聞いてみようと思いました。「こんな現実、日本では考えられない」と、母にMSFの方に聞いたことを話すと、母は活動について既に知っていたようで、「毎月の寄付」を始めることにしました。スピーチ大会の原稿は、実は、最初は別の題材で書いていたんです。原稿提出日の朝になってMSFのことが頭に浮かび、「これだ！」とトピックを変更しました。

原稿にはどんな思いを込めたのですか？

原稿には強い信念を持ったMSFの方々ことや、将来の夢や目標を「今日明日を生き抜くこと」だと考えざるを得ない子どもたちがいる現状を盛り込みました（下記参照）。「知ること」だけでも彼らを救えることや、MSFサポーターを増やすために行動することを発表しました。



募金活動では、先生や生徒会の仲間たちのサポートも大きな力となりました。授業よりも近いところで自分の時間を割いて協力してくださった先生方と接していて、「こんな人になりたいな」とも思いました。

MSFのために、募金活動や講演会も開催してくださいました。



大阪桐蔭高等学校  
中根 彩巴さん

スピーチをするだけではMSFのサポーターは増やせないと感じ、サポーターを増やすため、行動に移したかったです。校内で行った募金活動や講演会には予想以上の方が参加してくれました。募金活動はMSFの展示も兼ねて行ったところ、小学校入学前の子が、展示を見てメッセージを残してくれたんです。漢字をご両親に尋ねながら懸命にメッセージを書いている姿に涙があふれそうになりました。



「私が衝撃を受けた実態を、皆にも知ってほしい、という思いが行動の始まりです。スピーチをきっかけに、知ることの大切さを伝えていきたいです」

スピーチの一部をご紹介します

命の危機にさらされている人びとを救うために

私には、人生を通して実現したい目標があります。それは、さまざまな問題を抱える人びとを取材し、世界中に発信して、そのような人びとを救うことです。一年半ほど前、駅で2、3人ほどの小さなグループがキャンペーンを行っているのを見ました。そのグループは、「国境なき医師団」でした。（中略）

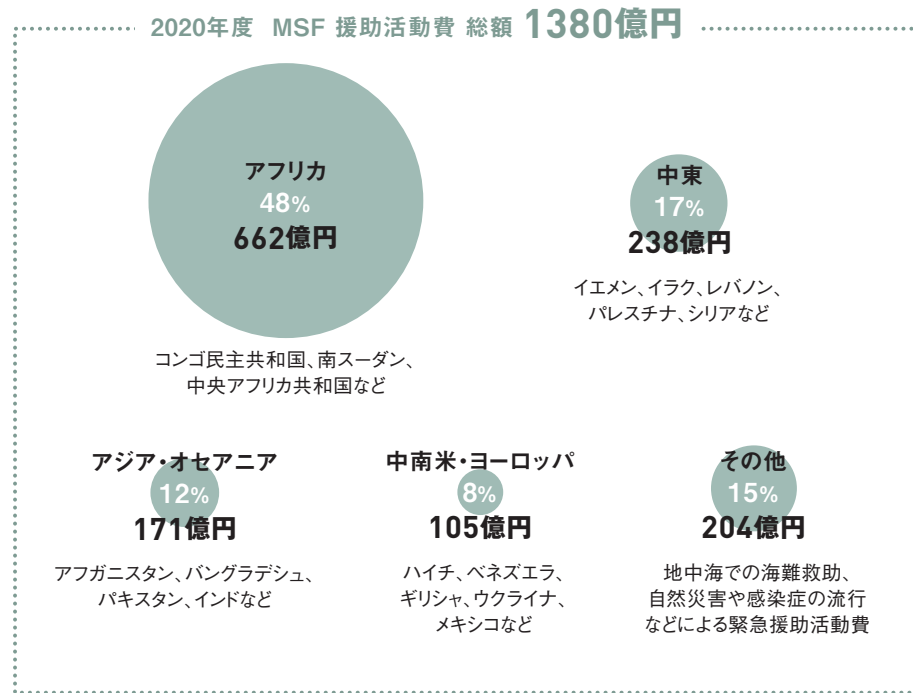
私はこの世界の現状を少しでも多くの人に知ってもらいたいのです。これを実現するために、私はそのような人びとを取材して、世界中にさまざまなメディアで発信したいのです。私は命の危機にさらされている人びとと、彼らを助けようと奮闘する人びとを発信するという形で支援したいのです。

今日、多くの人が次のことに目を向けていません。世界中には、医療が足りないために多くの命が危険にさらされている地域があります。また、深刻な栄養失調に苦しんでいる子どもたち、紛争や暴力から命からがら逃げしてきた人びとがいます。そして、彼らを救うために、栄養失調が深刻な地域に向かいその治療や予防に取り組む人びと、激しい紛争地で活動している人びとがいます。私は、これらの実態を伝えることで、支援者を増やし、悲惨な世界で生きている人びとを救いたいと思っています。（中根さんが作成した日本語の原稿より）

写真は全て中根彩巴さん提供。



2020年度、MSFは70以上の国と地域で、医療援助活動を予定しています\*1。  
MSF全体で総額1380億円(11億ユーロ\*2)を活動費として計上しています。



●主な活動予定国

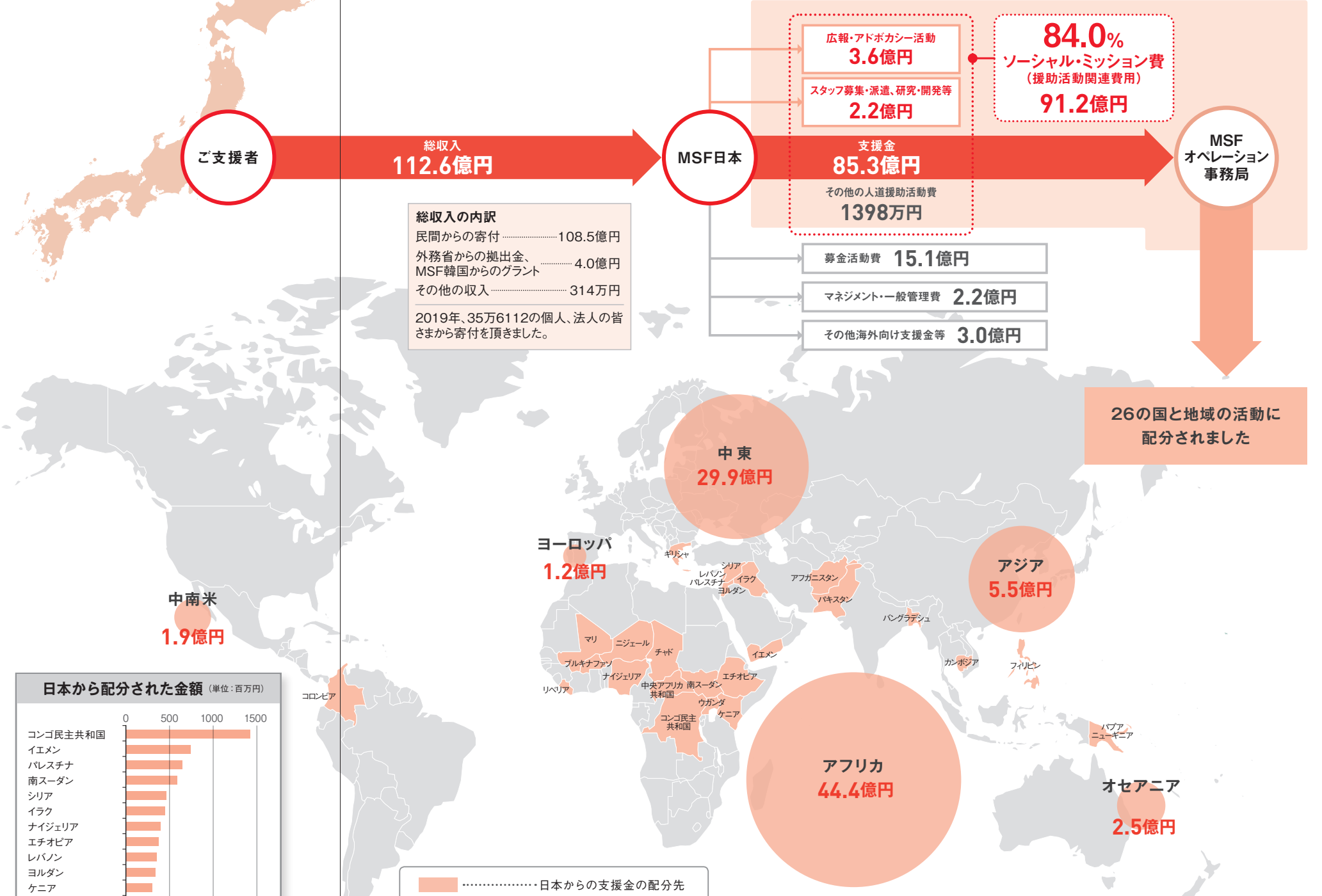
<p>[アフリカ]コンゴ民主共和国</p> <p>2020年度 予算額 <b>119億円</b></p> <p>これまでの活動例 [活動開始 1977年~]</p> <p>国内避難民や難民への基礎医療、心のケア、はしかやマラリアの対応、エボラ出血熱緊急援助など。</p> <p>●外来診療182万6300件 ●マラリア治療77万6600人(以上2018年) ●はしか予防接種146万1550人(2018~2019年10月)</p>	<p>[アフリカ]南スーダン</p> <p>2020年度 予算額 <b>96億円</b></p> <p>これまでの活動例 [活動開始 1983年~]</p> <p>国内避難民や難民キャンプ、へき地での医療援助。マラリアやコレラの対応、母子保健、栄養治療など。洪水緊急援助(2019年)。</p> <p>●外来診療115万7900人 ●マラリア治療27万6400人 ●出産助産1万4300件(すべて2018年)</p>
<p>[中東]イエメン</p> <p>2020年度 予算額 <b>85億円</b></p> <p>これまでの活動例 [活動開始 1986年~]</p> <p>紛争による負傷者の治療や救命救急、外科手術など。出産助産、コレラやジフテリア、はしかの対応。</p> <p>●外来診療53万5600件 ●手術件数2万4600件 ●出産助産2万4400件(すべて2018年)</p>	<p>[アフリカ]中央アフリカ共和国</p> <p>2020年度 予算額 <b>75億円</b></p> <p>これまでの活動例 [活動開始 1997年~]</p> <p>国内避難民への基礎医療、暴力被害者支援、母子および小児医療、栄養治療、マラリア、HIV/エイズ対応など。</p> <p>●外来診療件数85万2600件 ●マラリア治療54万6800人(すべて2018年)</p>
<p>[中東]イラク</p> <p>2020年度 予算額 <b>67億円</b></p> <p>これまでの活動例 [活動開始 2003年~]</p> <p>母子保健、救急・外科治療、心のケア、国内避難民キャンプでの医療援助。シリア難民への基礎医療や心のケア。</p> <p>●外来診療19万7600件 ●心のケア3万8500件 ●出産助産1万1100件(すべて2018年)</p>	<p>上記のほか、ナイジェリア、アフガニスタン、バングラデシュ、レバノンなどでの活動を予定しています。最新の活動情報は、MSF公式ウェブサイトの「活動ニュース」(<a href="https://www.msf.or.jp/news/">https://www.msf.or.jp/news/</a>)で随時お知らせまいります。SNS公式アカウントもぜひご登録ください(14ページご参照)。</p>

\*1 3月17日時点。また、新型コロナウイルス感染症緊急対応により、大きく変更となる場合があります。 \*2 1ユーロ=121.9円で換算。

●国境なき医師団日本の、活動概要と財務報告を掲載した「活動報告書 2019年度版」が完成しました。以下のURLではPDF版をご覧ください。<https://www.msf.or.jp/library/>  
WEB トップページ→MSF図書館・活動報告書ほか→年次報告書

(注)P.12~13の金額は四捨五入して表記しているため、各数値の合算と「合計」が異なる場合があります。

昨年度、MSF日本の総収入は112.6億円(寄付収入は108.5億円)となりました。皆さまからのご支援に改めてお礼申し上げます。また、日本からの支援金は26の国と地域(地図参照)に配分されました。



●各エリアの主な活動プログラム

<p>コンゴ民主共和国</p> <p>エボラ出血熱やはしかの流行の緊急対応、暴力による被害支援など。</p>	<p>イエメン</p> <p>紛争による負傷者の治療や、コレラなどの感染症の流行に対応。</p>	<p>フィリピン</p> <p>子宮頸がんワクチン接種や、家族計画の啓発活動などを実施。</p>	<p>バブアニューギニア</p> <p>国民の死因の2位・結核への取り組みに注力。服薬支援なども実施。</p>
--	--	--	---



## ご支援方法のご紹介 — 遺産からの寄付



© Judith Kornmann

私の兄は、1946年群馬県利根郡の山村に生まれました。第四子で長男でした。父は男の子の誕生に喜んだそうです。兄は穏やかな性格で、声をあらげることもなく、真面目で勉強や読書が好きでした。北海道大学を卒業して、医師の免許は取ったのですが、病気のため医師としての仕事をすることはありませんでした。英語、ドイツ語、ハンガリー語を理解し、スペイン語を勉強していました。歴史、文学、社会科学、哲学、宗教など多岐にわたり読書して、読んだことを紙に書いて記憶していました。そしてその知識をよく話してくれました。しかし2008年4月、急性心不全で急逝しました。62歳でした。

医師として働きたかった兄の気持ちを考えると、兄の遺したものは人の命を救うために使うのがいいと、私は考えました。そこで貴団体に兄の気持ちをお送りします。少しでも人の命を救うお手伝いができたら、兄もきっと喜んでくれると思います。

埼玉県 女性

ご遺族様からのお手紙

**未来に託すバトン。遺産寄付プログラム。**

未来を生きる命が、世界のどこに生まれたとしても、医療を受けられないという理由で命を落とすことがないように。夢を諦めることのないように。そのような願いを託していただけの「遺贈寄付」「相続財産からの寄付」そして「お香典・お花料の寄付」。近年お問い合わせが増えている寄付の形です。

その一つ、相続財産からの寄付では、相続人の方が相続された財産の一部または全部を寄付することによって、MSFの医療・人道援助を通じ、故人の優しさを「つぎの命」として遺すことができます。相続税の申告期限内に寄付を完了した場合、寄付した財産には、相続税がかかりません。

寄付受領後に、領収書と感謝状をお送りします。感謝状の宛名を故人のお名前にすることも可能です。

詳しい内容やお手続き方法は、お電話またはウェブサイトのお問い合わせフォームからどうぞ。ご相談や資料請求は全て無料です。

お問い合わせはこちら

お電話で

0120-999-199

平日9時～18時、土日祝日・年末年始休業

お問い合わせフォーム



### 3月に定例総会を開催。 新会長には外科医の久留宮隆が就任しました

去る3月21日に国境なき医師団(MSF)の定期総会を開催し、MSF日本の2019年度の活動と財務に関する報告・承認と役員改選を行いました。前会長の加藤寛幸は任期を終了し、新会長には外科医の久留宮隆(くるみや・たかし)が就任いたしました。そのほかの理事・監事メンバーは右記の通りです。

#### 理事

会長 久留宮 隆(外科医)  
副会長 中嶋 優子(麻酔科医/救急医)  
ユ・ソヒ Seuhee Yoo(医師)  
専務理事 櫻井 理咲子(薬剤師)  
会計役 齊藤 哲也(元国境なき医師団日本事務局職員)  
理事 田岡 知明(看護師)  
谷口 博子(元国境なき医師団日本事務局職員)  
辻坂 文子(コーディネーター/元国境なき医師団日本事務局職員)  
吉野 美幸(外科医)

#### 監事

ジル・デルマス Gilles Delmas(疫学専門家)  
リチャード・スーベール Richard Sebel(元国境なき医師団日本事務局職員)

#### 会長あいさつ

皆さまの日頃のご支援のおかげで、困難な状況に置かれた世界中の人びとへ援助を続けられていることに、あらためてお礼を申し上げます。

この度、国境なき医師団(MSF)日本の新しい会長に就任した外科医の久留宮隆です。この場を借りて就任のあいさつをさせていただきます。

私は2004年にMSFに参加し、リベリアを皮切りに12か国で15回の医療・人道援助活動を行ってきました。それぞれの現場で、皆さまのご支援によって多くの患者を受け入れられていることを実感しています。

一方、紛争地では患者や医療者が攻撃を受け、難民・移民は排他的な政策によって行き場を失っています。こうした人道危機を目撃している組織の代表として、日本の皆さまに現状を知っていただき、そして、私たち一人ひとりには傷ついた人びとに何ができるのか、共に考える努力を続けたいと切に願っています。

現在、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい、人びとが健康上のリスクにさらされています。これに伴い、MSFの通常の活動にもさまざまな課題が生じています。こうした危機的状況を乗り越え、助けを求める人びとに医療を届け続けることができるよう、さらなるご支援を強くお願いいたします。

皆さまからの熱い思いを、世界中の人びとへ直接、届けてまいります。今後とも、ご声援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

久留宮隆

久留宮 隆  
Takashi Kurumiya

1959年、名古屋市出身。外科医。三重大学医学部卒業後、三重県を中心に地域中核病院に勤務。現在、永井病院(津市)で救急を担当。MSFの活動には2004年より参加し、東日本大震災緊急援助や熊本地震緊急援助、イエメン、カメルーンなどで活動。2018年よりMSF日本副会長。

### MSFのSNS公式アカウントをぜひご登録ください

MSF日本は、下記の5つのSNSでさまざまな情報を配信中。ぜひ公式アカウントをご登録ください。各SNSの検索窓に「国境なき医師団」あるいはアカウント名を入力し、検索してください。

Facebook  
@msf.japanTwitter  
@MSFJapan

最新の活動ニュースや、MSFのメディア出演情報、イベント情報、事務局からのお知らせなどを日々配信しています。

Instagram  
@msf\_japan

活動中の風景や、奮闘するスタッフの姿、患者さんが見せてくれた笑顔などの、リアルな写真をお届けしています。



© Susanne Doetting/MSF

LINE  
@msf\_japan

最新ニュースのほかに、イベント情報、MSFにまつわる出版物などのご紹介を月に数回お届けしています。

YouTube  
チャンネル  
国境なき医師団日本

最新の活動ニュースを動画でわかりやすく解説。このほか、広報キャンペーンで配信している動画などもご視聴いただけます。

